武野光吉編集

浪華史畧

二編

上

010190509295
A414
5

武野光吉編集

滾花史略 二輯

月岡芳年畫圖

東京 二書房

48-7640

滾花史略三編序

書生羽織マンテルの糧を笑つて。
靴を草鞋に換を識る。遊ぶ世
界の人情を鑒賞し。弦を把く
鄙声を学ぶ。艷冶洋史の猟渉探
せば。三尺の童識猶ほ病ち聞口
多を。故り合せ対を歩く。三谷の

紙筆と化。輝き動き欲ス。今ヤ因循
たるく。午睡の枕と。朦朧たり。書
賈ハ主人ニ。機を密ふして。正史を
富む。予ハ。外を起シて。舊原書
を基本。繕寫ハ訂を。所謂寫真
ハ。形を模めるもの。幸を慶長の往古
に取。書體。筆方。今乃。新算を極擬
せ。遠莫。幼稚の百君。這書を指し
て。蓋。牙の餘論。搢紳。呂慶。祝
を。冀ふ。

于時明治第八年

七月初六日曜日

北平閑人後者識

君子在野
小人在位
大野修理亮治長

蛇一寸而
降雨
虎子地落
食牛
坂城四天王之一個
眞田大助幸安

木村主計頭重郷

雲鬢輕蟬翼桃
蛾眉淡春山掃
片桐主膳正の室
○きぬ〳〵は後ふ強る紙麻のるの乃
袖ゑ鞠のたゆうねの花
綾彦製

浪花史畧第三輯巻之上

東京　武野光吉編輯

○元龍の悔三女釀禍事

再説片桐且元大野治長ハ夜を日ふ次で驛路を急ぎ駿河の國へ着せ〳〵ゲ大御所公の怒憤をそぐかり阿部川を隔て德願寺ふ止宿ゑ〳〵本多正純許へ當着と報るふ公命嚴ふ〳〵て登城を禁ぎ斯て一両日を過〳〵本多上野之助安藤帶刀公命とうけて来訪せ

り庁桐敬して書院に請じ主客の禮かろく后両使大佛鐘の銘を難論するふ且元ことぐく詳解を両使唯々として去る厥后い且て糾正なく空しく二箇月五六の光陰徒費もふ閑寂たる寺院の弊として贊問いつん方もなく大野治長大ふ問ふ庁桐ふ隠し一書をさげて奉復をとふ然るに公を秀頼の隠謀數ヶ条を竝べさしたる返答なけきばの毛を吹き疵を索むる心地して大ふ恐縮す陳ふ本多方より雲箋

来る庁桐披見して甚驚き修理ふ對して疎忽を責る治長愈迷惑せしゞ書中に公命ふ〻〻執權の両士當地ふ滞留して邦憲い誰ゞ糾やらの条ありけるふ治長之幸と庁桐ふ皈坂して法律を正べき旨を語ふふ且元沈吟して領掌す大野い篭中を出る鳥の如く大坂へ立皈りて駿府表の顛末を言上るもふ右府公始淀殿も恐怖おそれて這上い幕府の簾中ハ妾ゞ婢なれば女使を以て仰分致べしと

とく俄ふ三女を撰まれける先大藏局正栄局二位局等ありし之等ハ皆能弁あれば公命をかこつけふ庁桐ふ梟明せんと急ぎ駿府へ下向あり本多正純方へ淀殿女使の旨を報ぜ正純即時ふ公へ訴へけるふ直ふ登城を容されけるに三女ハ祝び伺公あるふ先阿茶の局を以て故を問ふ大藏の局ガ曰ハく方今大佛鐘の銘ふ調伏の支まると浮浪人を召抱て叛逆の兆あり など大御所公の御不審を蒙り候支ハ皆市正先達て

稟開仕ハ然るふ未ど何の御左右も兼ねて祢ば右府公ハ淀殿も只徒ふ雨夜の月を詠ふ入る心地ふおハせど公の御返辞伺度宜しく御執成を冀侍と演けるふぞ局委曲曾得ざて公へ御披露致べしと退出せしガ須臾公ハ三女を召ひて御機嫌殊ふうるハしく遠路大義と仰あるふ三女ハ恐るゝ曰ハく御局迫白上たる願の趣き御軍濟被遊ふ難有旨稟あぐるふ公ハ笑せのひ九方今の支件まて我命令なるふあらぐ

之を幕府の所置に出たり去かるに将軍の怒を
解べき為なれば江府へ趣き申分を致べし我方よ
りも會得のため申遣さべしと仰あるに女使等を
案に相違して尠の心を安どつき禮申て退出る
江戸表へぞ趣きける公は俄に渡邊半造を召て将
軍へ密書を贈らる半造心得て汗馬に鞭打江城へ
走る之両舌の姦計なり徒て両三日を過し本多上
野之助正純天海僧正の両名德願寺へ訊問を賓主

の席定りて后本多正純の曰公命三ケ条あり問答あら
るべし片桐曰謹て承つらん正純曰第一に大坂城を
聞て和州郡山播州姫路へ城替なるべし然るを
第二に封侯同等に江城へ參仕召るべし第三に
御母堂を関東へ人質に出さるべし右三ケ条の内一
ケ条なりとも承諾之なきに於ては断然兵端を開て
坂兵を盡滅すべきもの公慮なり御返答白柬らまよ
市正瀧頭して曰らく皆々大支の公議なり然と虽

も太閤薨去の刻る公幼冲なる故以て大政を関東
ふ委ねん去を方今に至りて未だ天下の政權を皈し
あんず剰へ開城せよと何支ぞや公天下を知あ
を叶うべ共寧ろ坂城を持ちあんべし仍て移封の
儀い御肯仕るまじく候次ぎ関東へ參仕の支秀
瀬公ふ古大臣大樹ふ内大臣殊ふ君と尊敬ふ
ふ御支更承諾あられがたく存ぜ且い淀殿人質の
支之い臣ら上を斗るの罪恐あるい得ざる這の

一條のそい皈坂の后まろと懲懲仕るべしと回答ありて
両使心中ふ笑を含で立皈り此旨言上するふ公即時ふ
片桐を召あふ正純諭あく登城あ書院ふ扣へ居る
這時松の間ふく公ら清韓長老ふ鐘の銘を糾
正かりけるふ憶まる色ふく國家安康の四句い古来
より連續しなる文章豈怪むふ足んやなど亡論を
説破あるふ公い捷克の密策ふ怒まる聲をあるるせ
ふ嗜れ悪僧汝い羅馬鎮臺の縛ふ入た十字架上ふ

梁刑せらるべし耶蘇が末流あらんなど罵りのひく本多正信ハ預らず然して后市正ハ御對顔なる且元席を避て九拜を公宣曰白附なる三ヶ條の内淀殿人質の儀其方承諾之なるよ宜く斗らふべし且元曰天下の御爲粉骨を尽し諫言仕るべし公曰く夫ハ大義なりと仰られ夫より駿府ハ於て明郎とハ貸下され餓然ハ首尾の直りけるを諸侯伯往返しく賀しまける其后公ハ片桐を召れ其方渾家を失ひ

と少幸ひ本多正信の娘後家ハ予が媒ちせん宿の妻ハそべーと且元謹て所答稟す公曰淀殿下向の儀ハ至急ハ斗らふべー且元曰淀殿承諾なりて下向まさまなる時ハ品川ハ於て四町四方の郎地を下さるべくい哉公曰最安き支なり且元曰若御失念も恐入い百御墨附を賜るべーと公承引ありて墨附を下されぬる上ハ當城ハ空く益なー頓ハ飯国まんべー且ハ京師へ立寄り板倉勝重へ届くべーとて一書を授

邪正交舌て議論ふ恥る
天海僧正
本多正純

夜送趙綱楊炯
嶺氏連城璧由来
矢下傳送君還筐
府明月満前川
片桐且元

く且元領掌して次の日駿府を出立せり斯る処へ三女
い色青ざめて筧助太夫を誘引され駿府表へ飯りし
かど則ち本多正信伴なひて登城なる時ゐ公三女ゐ
宣いけるは汝等江戸へ参りけるゑ大蔵の局が曰く私
ども御臺様を力ゐ江戸へ参りい処姉妹ゐ淀
様ハ内翁を調伏せ敵なれバ女使を捕へて獄門ゐ
せよとの沙汰あり去を将軍様の御慈悲ゐて沙内
意を承り大木戸より罷飯ていと申けるゐ公曰く

左もかゝるゐん殺まんと思しゐ飯まんよ汝等よく承
つると當地へ飯り来りなば牢舎申付べきと思しゐ片桐
市正本多ゞ聟とあり淀殿を人質ゐ出し品川ゐく
四町四方の郎まぐを定む其忠節ゐめんドて命ハ助
けまをまべし疾く失よと罵りるひ一間へとそゐ入まゐ
三女ハ邈乎席を去り本多ゞ郎ゐ飯りて事情を詳
ゐせんと做ゐ正信怒の顔色ゐく一言も吐ぎ三女を
力なく立出しゞあさまりゐ片桐ゞ讒言なんと邪察

して這上を且元に追つひて支情を明らめせんと
雲を凌げる翼駕須臾にして濱松駅に追つき片
桐に對面して淀殿入質の支真偽を問ふ且元嗟嘆
して曰く吾此支を知る人に女使を留しに局等忠義なべ
抔と罵つて関東へ行しに不意姦計に陥りし尚云云と
論ずつて夫より同道して七月廿一日大津へ着し片桐づ
曰るやう小生に這書状を板倉へ届るなりおの〳〵同道然
なべしと雖も大藏の局飯坂を急ぎ言ふ応ぜん市正
に局等を論べきこと知るべし秋と分三女に大坂へ立飯り
正栄の局に何支も片桐承りて飯りいとふ大藏が曰く
両婦に君の御大事を思ひず詞を飾い得ども其實に且元
變心して関東に属し淀を人質に受合剰さへ本多
と鴛偶を結びい抔論しけるに淀殿大に怒らせのひ之
主を賣賊なれば〳〵飯り次第に首と刎て後々を
禁むべしなど罵りなみ右府公にも重成等に面
をかして宥ける却説片桐に京師に着し板倉に

對面して書札を渡す勝重披閲あるゝ庁桐い天下の忠臣淀殿幾人質を出すべきなと京地ゝ至らゞ能と與行せしゝ饗応して大坂へ帰すべきなる文体なり勝重庁桐ゝ公意を告るゝ辞を支あるとて山海の珍味も咽ゝ通ぜゞ能狂言も夢中の如く一夜三秋の思ゝ過し翌朝暇を告て大坂城へ立帰りける

○黒白混て討論せる事

牝雞の晨そるい國家を乱と淀殿井蛙の見を以て庁桐の仕をとゞゝ只壓ゝ誅戮を加へんとて各將歎願して糾正を乞ふ仍て勘ゝ怒と考づゝ上使を以て八月六日ゝ登城を免せ又大野治長い石川伊豆守薄田隼人と招き庁桐を討取べき旨をかとらゝゝ両士を命を諾しゝども奚ぞ忠臣なる且元と害さんやとて潜伏す斯て本日辰の刻ゝ庁桐且元い木村重成附添て與殿ゝ至る時ゝ廣々なる千畳敷ゝい各將星の如くゝ列を正し光耀なる簾を掲ゝ香爐峯の雪を

欺く淀殿が妖艶なる粧ひ似て笑容の睦りと逆だて
市正と打ちつれと白眼ひて爭ふや且元汝が妾を太閤の
少妻なりと悔慢信長公の姪なる支を知らんで臣なる郎ら
て上を軽しめ妾と江戸へ人質ふ出さんと計り剩さへ本
多正信が聟となり右府并ふ妾ふも報をして江府ふ
郎地を定め且い京師ふ滞留して何支おら謀る人面獣
心の不忠とやいはん不義とやいはん至急白痴の首刎
よと息勢ちて宣ふみぞ庁桐謹ぎ同答るい之一を

聽ぎ二を會得めさね所支ちと之みい深き遠謀ありて
君の御大支ふいつべ密々御聽下されかしと演ど淀殿
空吹風ふ聽ずるんいば番頭熟諫言ひきと當ふ怒の
解ずいい拒べ番頭等い叩頭して臣等ぎ意見御用ひな
くば御返王りて割腹致しまべくとありけもど其義
隨意ふせよかしと命ずるみぞ一列ふ席を拂つて去んし
ぬを庁桐急ふ押止る大野以下の佞人い斜眼ふ看や
りて笑べ木村重成慾ドて曰らく君ふ殉忠と存ぜ

ぞ席に列る侍人等殄戮あて屠腹せんとの口惜きを支
うるまど舌論紛々として氷解あり孫八旦元憤懣を忍て
駿府公の三ヶ條を建言し右御回答被成べしと言語
席を退ぞ重成の玄関まで送りける公れが大野が刺客
等い画餅と成りて治長憤るとも詮きやうなく再
度織田常真を招て片桐と誅戮すべき旨とかとらん常
真承諾して邸へ帰り直に片桐許へ淀殿の隠謀を
告て大坂を退去せしかば大野等周章して大手の

城門を閉ぶける侍て秀瀬公より速水甲斐守今井源左
衛門を片桐ヶ郎へ遣わし三ヶ條の秘策を問旦元曰く
何も究竟の難論なれど淀殿人質の一ヶ条と義諾せ
い故なる哉なり去る天禄年間征韓和平の後来朝し
なる醫官伯智先生とかくる個ふく人の命数と考究せ
り仍て豊公豚を取らせ一其坐に家康長政なり各
豚を戴く天寿を記載せ豊公六十三秋の中旬長政六
十八春の下旬家康七十五歳の上院となり右書付ハ

で生み御預けかりて餘入み洩さるもの上意をうり陳ずみ
豊公とうり長政ゑ至る迄伯智ゲ究者響の音ゑ応ぎ
るが如しみが駿府公本年七十三歳今二年の天壽ゑ
り淀殿人質と定て品川ゑ方四町の郎地と望む自
地形念入て一檢も費やし木材上方より船積もと
て難風ゑ覆まりと詐術一年も延し衆下向と半府
い虚病をかまへて半年も遅滞ぜんれめ年間みを
大御所かるらで病死ゑるべしこの虚と計て軍馬を

起し関東を攻しく豊臣の天下ゑ既せん支を胸み
畜ゥ定めたる四町四方の郎地ありと渡をそいぐ演
述ゑぞ両使ゑ慢み感激し此上ゑ我々躬み替て伸究
と立飯りて淀殿へ直諫かれど所謂對牛彈琴ゑれ
び両士ゑ今ゑ力ゑく片桐へ恁と報ぜ且元天と仰で
歎曰功を辞りて扁舟み棹きん范蠡み倣ハぎ累年
の殉忠と一朝ゑ投も時ゑる哉みの上ゑ居城茨木
へ退去きべしく俄然ゑ一族郎黨を集會しく

評定ある曰我當城を退うが大野等必ず追ふまべし
故ふ時日を齟齬し敵の策畧の裏をかんと先
使節を以て建白ある由臣市正武門と足ぎり高
野山へ赴き佛縁を結ひ申べくひ仍て弊藩来ル九月五
日當城を引拂申べき旨うり淀殿へ之を聽く密ふ
祝ひ王ひ我為の勝雲を拂ふうと即今承諾かり
けを忠臣の各將嗟歎し直諫きると久とも詮
方なし徒て片桐且元へ退去の時日九月五日と令し
密ふ同月一日未東雲のかの黒き頃俄然ふ供揃して
京橋口より操出せ先舎弟主膳正貞隆を始め兵士
百八十騎鉄炮二十挺長柄二十筋號令嚴ふ地を拂
ひ意気揚々と退きける

○重成汗馬躍て片桐を追ふ事

遠山雲を吐て行客の跡を埋り秋水白うして茫々たる
淀の流の音ふ軍長柄堤の露寒く嘶く駒も北風
を悲しむうのと躬ふ忘へ隊伍ふ離れ片桐ゞ徐々歩

む後よりあくまでと呼声も風のごとく迯るまど且
元馬の轡を止め誰と仰面程あそばされ駿馬の鞭うち
馳来るへ木村長門守重成なり互ひの信義の深く
れ重成馬上の禮義と正しく實なや咫尺もはざる時
へ千里の遠しと兵書の語君諫を信じて諫を遠退不仁
の所置なれば〳〵貫殿退城召れるへ瓦解せん事目前
述懐あるを去ぬ〳〵之より城内へ帰しまぐ拙者
郎へ潜居申一命を加へ諫言申さん倘御承諾あら

時へ死を同日に致すべしと語の信義いまわれども片
桐特と無望曰何ぞ大度の覆るを豈一木の力を用ん
重成曰茲へ心得ぬ語なる三度諫て朝去古語へなれ
ども貴殿へ日頃の殉忠を反心と危邦を指て脱
走あるへ之へ深き謀畧なるん冀ば示へ且元曰
別ふさしなる秘計なし我高野山へ行なん詐實へ関東
へ降るまり然へなれども先達て紀州九度山へ寓居な
も真田左工門佐幸村を大元師へ仰べしと君を勸

長堤の
哀別
両雄腸
を断ち

つ密らみ小生使を以て君臣の禮義を堅く結たるを
須臾入城致すべし去かゝみん日本の百萬軍で攻る
ともヤハ落城を致すはゞとつよ重成感ゞと曰く斯
まで忠義を貫く貴公真田殿と詢謀軍畧廻らし指
揮ゝ世信ゝ白も虎ゝ翼我君のゝ煩慮ゝ復
拙輩ゞ心と級再飯城ゝれの語を消して片桐ゞ
敢や小生再勤ゝ淀殿放恣の弊やまゝを百事左
様と成のゝゝ之籠城の妨害ゝ餘義ゝく敵地の

犬とゝるゝも魂ゝ君の傍ゝ一度ゝ大変を報知申
さん東南敵地へ降ゝ躬の拙判ゝ脱ね瓜田の沓と
云ゝ重成莞尓と笑ひ梨下の冠躬を正し瓦と成
く全ゝ玉と成ゝ碎ゝ敬軍卍ゝ切破ゝ
勝関挙ゝを觀覧ゝれ片桐曰く如何ゝも修羅の戦場
ゝ智勇勝し和殿ゝ初陣その潔き我一見せんと言
ゝ一書を取出し開ゝ小生ゝ其の星霜意を凹し苦
肉の一書飯城の后ゝ披見ゝと渡せば重成押戴き

昔み淮の六韜三畧なる愉快と懐中まゝ尚庁桐ゲ袂ふ
まゞ夫み依ても貴殿とふ生如何なる前世の宿縁う
我幼稚より親み離れ公を師とゝて軍書ふ恥り授ゝ
御恩ハ海山の家父とも兄とも隊駒二竜欽慕ゝ甲斐も
情なや艶者のたゞみ雲泥ら不意袂を分のも明日
ハ無常修羅頭み思へば之ゲ今生の長い別れよ候ふと
ゝろと落も一雫片桐とても懐旧の思ひよ袖を濡
らゝゝふ生とても和殿とハ血縁よ増る水魚の明

友忠義の二字を忘ま紙ど斯まで鶏とゝり行ハ大坂城
の傾く端相爰ゲ浮屠氏の生者必滅會者定離とハ
知りながゝ忍びがゝきい人間の愛情因も深き其許
ゲ面を看も今日限りと跡去ひさゝく謦欬ふ支吾
ゝ千萬りみても飯らぬ贅言隨分無支ふ高名ゆも
と聲も曇ゞ重成ゲ貴殿も御機嫌宜ゝふと互に
言ど武士の意地電光石火の夢の荘とおりゝた未
うら若き鵜殿の芦よ汐克くおつと飛翥寒蟬

も同音を添て七瀬川コクゝ水のあふれみも淀
の継ゝ中絶ゝ霧にまぎれく三重の櫓らも
かすむ大坂城今ぞ名おりと見るゝゝ雨
を誘へるうぐひす塚ゝゝ柄堤の名おい似
ずみどかき契り朋友ゞ名残りをつきドさ
ゝ
ゝやとをうゝに顔を陣笠をかくせゝすぐる
袖袂ゝきゝも響く鐘太鼓おい大野等ゝ跡と
追ひうゝけ軍馬をかけると知るかゝゝ因循な
らゝと両雄士ゞかげゝこゝるまゝふりかゝり別れく
ふなりふける

浪花史畧三輯巻之上 畢